

教育産業における情報通信技術の導入に関するメディア史的研究

代表研究者

藤 村 達 也

奈良女子大学 文学部 特任助教

1 はじめに

本研究の目的は、教育産業における情報通信技術の導入が、受験文化にいかなる影響を与えたのかを歴史的な視点から捉えることにある。そのために、増進会における学習者文化を事例とし、コンピュータによる会員管理の合理化が進められたことでそこにどのような変化が生じたのかを明らかにする。

2 情報通信技術の導入がもたらす受験文化の変容

2-1 研究対象と資料について

本項では、対象とする増進会と資料『増進会旬報』について説明する。増進会は、旧制中学の英語教員であった藤井豊が、東京淀橋で実力増進会として1931年に創業した。当初扱っていた科目は英語のみであったが、1932年には数学・国漢（国語・漢文）も開講され、月3回（1日・11日・21日）問題と旬報冊子が発送され、成績表、投稿欄、質疑応答を掲載した付録や、月報も発行されており、戦後に続く通信添削の体制はこの時点ですでに原型ができていたという（増進会出版社 1991）。

増進会はその後戦災に遭い指導を中断して静岡県に疎開し、再開したのは1952年であった。指導再開以降の増進会は難関大学志望者の間で広く認知され始め、また合格実績において飛躍を遂げ、とりわけ1950年代から1960年代にかけて東京大学・京都大学の合格者全体における会員数・会員率がともに大きく増大した(図1)。

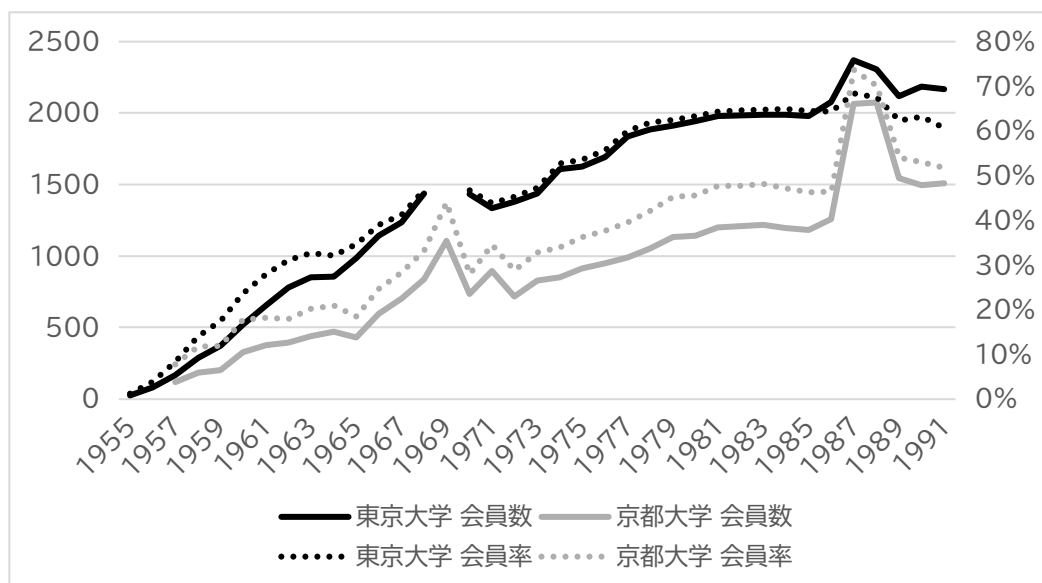


図1 東京大学・京都大学の入学者全体に占める会員数および会員率¹
(出所 増進会出版社（1991）および『増進会旬報』各号より著者作成）

その後の1970年代は大学受験が全体的に変化した時期である。最も大きな要素として、受験競争の大衆化があげられる。1960年代末には第一次ベビーブーム世代が大学進学期を迎え、進学者数・率ともに大幅に増大し、それに伴って受験生の学力や志望校も多様化した。また1960年代後半から1970年代にかけては駿台予備学校、河合塾、代々木ゼミナールなどの全国型予備校や、増進会と同じく通信添削を主力商品とする福武

書店も発展を遂げていた（木村 1999；井上 2008b）。

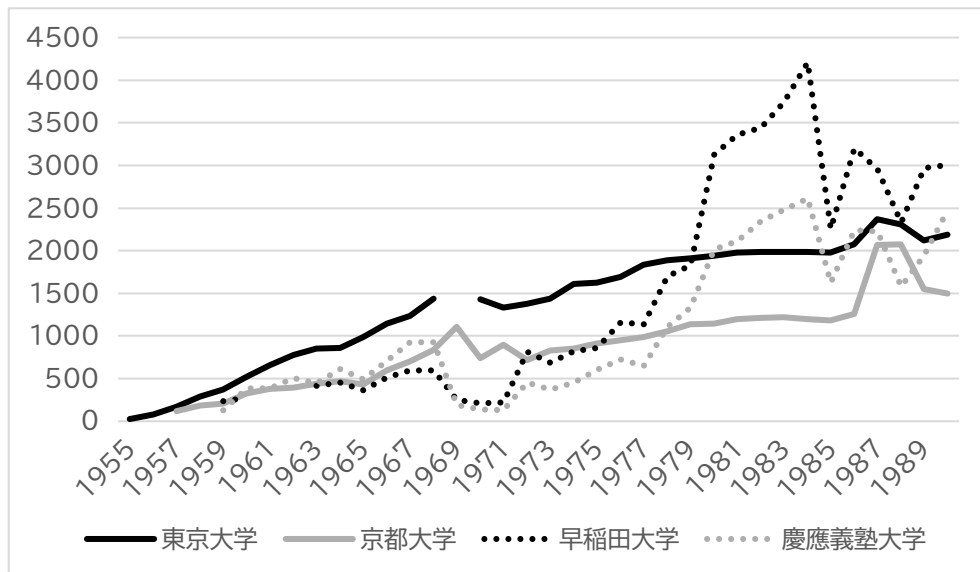


図2 増進会会員の難関大学合格者数²
（出所 増進会出版社（1991）および『増進会旬報』各号より著者作成）

受験をめぐるこうした動向は増進会にも変化を迫ることになった。1960年に個人事業から有限会社へと変更した時点では、社員数5人、資本金100万円という小規模な家族的経営を行っていたが、その後とりわけ1970年代には増進会は大きく経営規模を拡大している。「大学を目指す人がどんどん増えている時に、旧来の方針のままでは相対的にシェアが低下してしまう」（増進会出版社 1991：112）ことを危惧した増進会は、対象となる顧客層を広げることで対応した。社内では反対する声もありつつも、「東大・京大のZ会から一流大学を目指す人のZ会へ」（増進会出版社 1991：112）と位置づけを変えていくこととなったという。実際、増進会では1970年代には早稲田大学、慶應義塾大学の合格者が飛躍的に増加しており（図2）、また私立大学志望者の志望者増加を受けて1981年には私立大コースが開講されている。

こうした経営方針が功を奏し、1960年度に約5000人であった会員が1980年度には約40000人まで増加している³。そして会員の増加は運営体制の合理化を要求した。共通一次試験が実施された1979年には「会員数の増加、人材の確保、執筆者との連絡、物流の改善などのために中伊豆にこれ以上とどまることは困難となってきた」（増進会出版社 1991：115）ために、本社を駿東郡へと移転した。これと同時にコンピュータが導入され様々な面での情報化が進んだという。

このように、増進会は戦後の新制大学受験において早い段階から難関大学志望者に支持され、経営規模を順調に拡大してきた。また1960年代後半以降の大学受験の大衆化を経て、顧客層を東京大学・京都大学といった最難関国立大学から広く難関大学の志望者へと拡大し、またコンピュータの導入による情報化といった変化を遂げている。増進会の変化を追うことで、受験文化がどのように移り変わってきたのかを受験メディアとの関連から跡づけることができるだろう。

本研究では資料として、会員に月3回送付された『増進会旬報』⁴（以下、『旬報』）各号を中心に用いる。時期にもよるが、『旬報』は以下の内容・構成を基本としている。（1）添削問題の解答・解説が掲載され、受講者の答案を踏まえて指導する講評や指導余録の欄がある。優れた答案などが取り上げられ、学校・名前（本名あるいは筆名）・志望校が掲載される。（2）会員投稿欄（以下、投稿欄）があり、学校・名前とともに投稿が掲載される。（3）答案の採点結果をもとにした科目別のランキングが、学校・名前・志望校とともに掲載される。これらの他にも年度や時期によって合格者名簿、コラム、出願動向、質疑応答、合格体験記、大学情報、合格者座談会などの様々な記事が掲載されていた。本研究では、通信添削が持つ学習教材としての側面よりも、受験文化を形成し普及させるメディアとしての性質とその変化に着目するため、とりわけ上記の（2）と（3）に着目して通時的な検討を行う⁵。また、経営体制の変化などについては、創立60周年を記念して刊行された社史（増進会出版社 1991）に依拠して記述を行う。以下とくに注記のない場合、基本的事実

に関する情報はこの社史あるいは『旬報』を出典とする。

分析対象となる時期は、1955 年度から 1985 年度頃にかけての約 30 年間である。分析の始点については、Z 会本社に保管されている『旬報』が 1955 年度以降のものであることに加え、この年は東京大学合格者が 25 人に達し、戦後における増進会の発展にとって画期とされることによる⁶。終点については、大学受験の大衆化による影響を検討するため、1980 年代中頃までを対象としている。加えて後述するように、調査と分析の結果として、1980 年頃には『旬報』上での利用者のコミュニケーションが大きく変容し、1984 年度の『旬報』再編以降は特筆すべき変化が見られなかったことにもよる。

2-2 「会員くらぶ」における学習者の共同体

本節では、『増進会旬報』の投稿欄に着目し、そこで交わされたコミュニケーションのあり方とそれに基づく共同体意識の特徴、およびメディア環境の影響による変化を分析する。

「会員くらぶ」と題された投稿欄の内容は、学習の内容や方法、受験生活の悩み、志望校選択、大学・予備校に関する情報など大学受験に直接関係するもののみならず、政治や人生論、読書、恋愛、健康、テレビ・映画や音楽など多岐にわたっていた。ときには激しい論争が繰り広げられ、過去の特定の投稿者に対して冒頭で「〇〇君!」、「〇〇殿へ」のように呼びかけ、共感や反論を表明する投稿も多く掲載されていた。受講者からは「毎日十数通」（1965 年 5 月 1 日）の投稿があるほどの人気を博しており、代表の藤井自らが編集し、「一応適否の選択はしますが、あとはだいたい原稿通りで、左右を問わず、硬軟選ばず」（1965 年 5 月 1 日）という方針で採用されていたという。

投稿欄を通じたコミュニケーションは、ときに『旬報』外にも展開していた。「皆様と（男女を問わず）はげましの通信を切に希望しています」（1955 年 5 月 21 日）、「貧農の次男坊として生まれた私は予備校など問題外で、唯一つの頼みの綱は添削、他にラジオぐらい。同じような境遇にある方と文通したい。お互い励まし合い、力強く、この一年を生き抜こうではないか」（1957 年 4 月 11 日）といった投稿にみられるように、自分の住所を掲載して文通相手を求める投稿が非常に多く寄せられていた。他にも、「昭和 14 年頃発刊の旧体制の代数学についての参考書が（例えば「代数学のあたま」などです）手元にありましたらお譲り願えませんか。値段はいくらでも結構です」（1957 年 8 月 21 日）のように書籍の売買・譲渡や、「来春、一橋を受験するものですが、諸君の中に泊めてやろうという方がおられましたら、ご一報ください」（1968 年 1 月 1 日）のような受験時の宿泊先に関する投稿もしばしば見られた。紙面での不特定多数のみならず、ときには特定の個人との直接的なコミュニケーションにも発展していたといえる。

こうした交流を活発化させていった装置が筆名である。1955 年度時点では投稿欄やランキングで使用される名前は大半が本名と思われるもので、一部少数にイニシャルを使用する者がいる程度であった。しかし 1957 年度初頭から、「C. G. S.」や「Red Shoes」、「Genius」といった筆名の使用者が少数ながら現れた。こうした筆名の使用をめぐるのは、1957 年度に賛否が投稿欄で議論された。「【お願い】此の頃よく見かける「早入亭猪突、赤い靴、白雪姫、あけぼの、休火山」などという方々! 若しどうしても匿名というのなら、もっと名前らしい名前にして下さい」（1957 年 4 月 21 日）のように否定派もいれば、「No. 4 の会員くらぶのところにもお願いとして妙な名前はやめてくれとありましたが、私は今のままの方が好ましいと思います。私がこの会へ入ったのも、この会員くらぶとランキングの『Red Shoes』とか『休火山』さんとかいう名前を見て、この会に入っている方々は皆さん愉快的仲間だと思って気に入ったからなのです」（1957 年 5 月 21 日）のようにペンネーム賛成派もあり、活発な議論が交わされた。その後、女性を装った男性会員の存在や匿名投稿者による投稿の無分別さなどをめぐって筆名の氾濫に苦言を呈する投稿が散見されるものの、次第に筆名の使用が一般化し、1965 年度頃には筆名と思われる名前が大半を占めるようになった。

筆名の存在は、会員が交流するうえで重要な役割を果たしていた。合格座談会では「旬報や答案の上では親しくなっているが、顔を見るのはほとんどはじめて。『シャーベット・トーンです』と高橋君がいうと、(あゝ、そうか) というほゝえみがみんなの顔に浮かぶ」（1963 年 4 月 11 日）といったように、筆名によって互いに認知していたことを示す場面が多々あった。

大学に合格した元会員の筆名を他の会員が受け継ぐ「継承」という文化も生まれた。「僕の筆名 Sad Sack II をだれか継いでくれませんか。この筆名は兄から受け継いだもので、(中略) 兄も僕も一応東大に現役でパスしていますから今のところこの筆名は「土つかず」というところです。(中略) 希望者は自己紹介の手紙をください」（1964 年 4 月 11 日）という投稿があり、一年後には「さて僕の筆名“Sad Sack”をだれかに継いでもらいたいと思います。Sad Sack I は文一から法学部へ進み今春卒業した人。Sad Sack II は、僕の先輩で、

去年一年、受験生活についていろいろと指導、アドバイスをしていただいた。現在文一2年。Ⅲが僕で、僕のところまでは3人も、現役でパスしました。(中略)希望者は御連絡ください(1965年5月1日)というように、「三代目」が次の継承先を探していた。

このように、筆名は匿名性を担保したうえで会員のアイデンティティを示す役割を果たしていた一方で、筆名欄自体が自己表現やコミュニケーションの道具としても機能していた。「Z会に存会中は、筆名をあれこれひねって、それを楽しみとしてきた(1963年5月21日)のように、投稿ごとに筆名を変更し、そこに意味を込める会員も少なくなかった。それを象徴するのが、「会員くらぶ」やランキングに登場した筆名について、会員が特定の基準から論評する「筆名コンテスト」という文化である。たとえば、「Z会主催第2回筆名コンテスト発表!」と題して、「Z大賞」、「努力賞」、「ユーモア賞」、「ハイセンス賞」、「ナンセンス賞」、「新人賞」、「エログロ賞」、「特別賞」、「佳作」という各項目に、過去の『旬報』に掲載されたペンネームを選定しているものがある(1967年2月1日)。これに対して別の会員から、「心待ちにしておりました第2回コンクール審査を見て、いささか失望の念を禁じ得ませんでした。ユーモア賞はきみと同意見ですが、Z大賞、努力賞に至っては、共にゴテゴテとして韻律的な美もみいだせず、むしろハイセンス賞を高く評価したいと思います(1967年3月1日)」といったように、筆名評に対するさらなる論評が複数寄せられていた。筆名の存在自体が会員間のコミュニケーションを促進していたといえる。

このように「会員くらぶ」は、会員間コミュニケーションの場として機能していた。「また一ばん楽しかったのは『会員クラブ』だった。恐らくこの欄を設けているのは増進会だけだろう。僕が旬報を手にして最初に見るのは『会員クラブ』である(1960年4月11日)」、「特によかったのは、『会員くらぶ』であった(どうもすみません)、受験生の悩みやものの考え方が、よく表されていた。ここは繰り返し読んだ(1963年6月21日)」といったように、合格体験記や合格者座談会においても、「会員くらぶ」が重要な存在であったことが頻りに語られていた。会員にとって「会員くらぶ」は、添削問題の解答解説と並んで、あるいはそれ以上に重要な位置を占めていたのである。

2-3 共同体「Z会」の形成

上でみたコミュニケーションを通じて、会員は増進会という集団に意味を見出していた。その最も象徴的な現象として、「Z会」という名称をあげることができる。現在では「Z会」という名称が社名とともにブランド名としても用いられているが、これは受講者のなかで普及した愛称を増進会が自ら取り入れたものである。1958年頃から「会員くらぶ」で増進会を「Z会」と呼称する投稿が増え始め、1960年度の入会案内では「Z会」という表記が正式に用いられるようになり、Zの文字が刻まれた公式バッジが販売された。1961年度の入会案内では「本会は創立当時は『実力増進会』が会名でしたが、戦後は『増進会』を正称とし、さらに『Z会』の略称も用いることにいたしました」という記載がなされるに至った。

会員が増進会に対する帰属意識や他の会員に対する仲間意識を表明することも珍しくなかった。「急告! Z会会員諸君はZのバッジを至急つけよ! 特に試験の時はバッジをつけて試験場にのぞもうではないか。小生は阪大志望だが、試験場で会員諸君に逢えるのを楽しみにしてるぜ(1961年3月2日)」、「君の学生服のエリ章に“Z”のマークを発見。同族…?を見い出した時のこの歓びにも似て心温まる思いでした(1961年2月1日)」といったように、同じ「Z会」の会員であることによって帰属意識や仲間意識が生じていたのである。「今度、仙台へ出るようになりました。ところが同じ下宿にZ会員の能代の■■さん[引用者により匿名化]とおっしゃる方がおいでになり、とても楽しくなりました(1961年8月11日)」といったように、入試などで会員同士が直接対面した際にも、互いが増進会の会員であることを契機とした交流の報告がしばしばなされていた。

増進会に帰属意識を抱いていたからこそ、その在り方についても会員から積極的な意見が寄せられており、ときには運営方針に対する批判的なものも少なくなかった。「あーア、Z会でも旬報に表紙つけはじめたネ。ぼくがっかりしたなあ。(中略)いままでの方が添削会(純粋な)らしく、また威厳があつて重みがあると思うんだがな(1966年9月1日)のように運営や編集の方針に否定的な意見が載せられ、編集部から返答がある場合もあり、ときにはそうした意見が編集方針に採用されることもあった。

こうした増進会に対する批判さえ含む自由闊達な議論は、編集・運営側によって促進されていた側面もあった。「指導部→会員という一方的な流れだけでは、いかに指導部や出題陣にすぐれた頭脳が揃っていたとしても、ひとり合点・マンネリズムになってしまいます。これに、会員→指導部という流れが加わってこそ、いきいきとした指導が可能となります。(中略)まず、毎旬の感想欄を切実な感想で埋めることから始めて下さい。

一層豊かな流れとしてお返ししましょう」(1957年5月11日)のように、増進会は会員からの意見を積極的に求めている。

「会員くらぶ」の在り方についても頻繁に意見が寄せられ、議論が交わされていた。1966年度には、「Z会はとても良いと思っていますが、どうして会員くらぶは他に例がないほど低級なのでしょう。とても友達に推薦しようにも、恥ずかしくてできません。(中略)勉強するためZ会に入っただけです。余計な知識なんかつかなくて結構です」(1966年6月21日)といった投稿があった。これをめぐっては激しい議論が交わされ、「今日の受験雑誌界にあって、Z会の会員くらぶほど自由で独特なものが他にあらうか」(1966年7月11日)といった批判的意見が多く寄せられた。

こうした議論は頻繁に行なわれ、「最近この欄をもっとまじめな記事を多くしようという意見がありますね。私はダンコとして反対！このらん—受験生活における楽しみの唯一のトリデーまでが、あのいやなグレイ色でぬりつぶされてしまったら、いったい私たちは、どこに楽しみを見つけることが出来るでしょう」(1960年1月11日)のように、単なる受験勉強だけではなく、ユーモアなどを含んだ多様な文化があることに「Z会」らしさが見出される一方で、「高校生としての良識を失わない程度のものであってほしいな。何とつけようと自由であるとは言うものの、『明星』だの、『平凡』だのの読者投稿欄とはちがうのだから」(1962年5月11日)のように、品位や威厳を保つべきだという意見も絶えず寄せられていた。「会員くらぶ」を中心とした「Z会」共同体は、難関大学志望者＝学歴エリート予備軍としてのアイデンティティを保ちつつ、受験生の交流と息抜き場の場としての意義を与えられていたといえよう。

また、前節でみたコミュニケーションの様式や、本節で検討した「Z会」への帰属意識は、世代を跨いで継承・学習されていった。一般的な雑誌であれば継続的な読者がいるのに対し、受験準備目的の通信教育では入試が終われば受講を終了するのが通常である。そのような環境で、文化の継承にとって最も大きな役割を果たしたのは、合格体験記や合格者座談会といった、大学受験を終えた会員による現会員に向けた語りである。とりわけ合格者座談会では、「増進会をどのように使用したか」という話題が頻繁に取り上げられており、学校や予備校との両立の仕方といった学習方法に加えて、「会員くらぶ」などのコミュニケーションやそれによる学習意欲の維持についても語られていた。また「[最近の心情](中略)Z会の旬報に合格体験記を書きたい」(1970年1月1日)といったように合格体験記の執筆は受験勉強に励む会員にとって目標とされることもあり、「Z会」の会員としてのモデルストーリーを再生産する役割を果たしていたといえる。

このようにして、前節でみた「会員くらぶ」上でのコミュニケーションは、「Z会」という仮想の共同体を形成し、「我々会員皆で作上げた旬報という気がしませんか」(1955年7月1日)といった発言にも表れているように、会員の帰属意識を醸成していた。そしてそうした共同性や帰属意識は、先にみた「会員くらぶ」上でのコミュニケーションを通して形成されていたのである。

2-4 紙上コミュニケーションの消散

ここまででは、1950年代から1960年代にかけての『旬報』を検討し、メディアが可能にしたコミュニケーションとそれに依拠した共同性のあり方について検討した。しかしその後、増進会および『旬報』のこうしたあり方は、1970年代以降変容を遂げる。本節では、進学希望者の増加による大学受験の大衆化という外在的な影響を受け、増進会およびその中心を占める学習メディアとしての『旬報』がどのように変容し、またそれにより学習意欲の加熱装置がどう変貌したのかを分析する。

すでにみたように、大学受験の大衆化を経て増進会の経営規模は拡大し、会員の量的拡大と質的多様化という変化に直面する。「東大・京大のZ会から一流大学を目指す人のZ会へ」(増進会出版社1991:112)と言われたように、難関大学志望者を中心としつつも、志望校や学力において以前よりも多様な受験生を抱え込むことになるのである。

このような会員層の変容と軌を一にして、『旬報』上でのコミュニケーションが占める位置にも変化が生じる。すでにみたように、それまでは合格者座談会において、自らが使用していた筆名を述べることでお互いを認知する、あるいは「Z会の使用法」として「会員くらぶ」やランキングに言及するなど、『旬報』を介したコミュニケーションが主要な話題の一つとなっていた。しかし、1973年に小さく言及されたのを最後に「会員くらぶ」への言及がなくなり、1976年からは本名のみが名乗られるようになる。

代わってこの時期から「会員くらぶ」の多くを占めるようになるのは、「近ごろの会員くらぶは、わけのわからん詩ばっかしやたら多くてまったくくだらん」(1973年8月11日)といった投稿にも表れているように、自己完結したエッセイや詩などである。「会員くらぶ」では投稿やペンネームを類型化する投稿がたびたび見

られたが、そうしたものの一つとして、「ただ闇雲に自分の不平不満を並べ立てても、会員くらぶには載りません。コツがあります」といって「傾向と対策」と称し、投稿を「青春談義」、「受験体制批判」、「宗教問題」、「人生論」、「ポエム」に分類するものがあつた（1977年8月11日）。この類型論からもうかがえるように、社会問題に関する持論や、自らの私的な問題や心情についての文章が多くを占め、投稿欄を介した会員間コミュニケーションは『旬報』の中心ではなくなる⁸。

そして1980年代に入ると、投稿自体が減少していった。1981年度から『旬報』は基礎科旬報、私立大受験科旬報、国公立大受験科旬報の三分冊になり、「会員くらぶ」はそれぞれ「遊歩道」、「散歩道」、「並木道」と改称された。『旬報』の分割以降はさらに投稿が不活化し、投稿がほとんど掲載されないことや、カット（イラスト）のみの掲載となることも少なくなかった。

こうした変化の背景として、『旬報』というメディアをめぐる変化を指摘することができる。第一に、会員層の拡大は指導体制、とくにコース設定や教材編成に影響を与えた。この時期の増進会では志望校や学力に基づきコースや科目、『旬報』冊子の細分化が行われた。1955年の時点では、英語、解析Ⅰ、解析Ⅱ、国語と4科目（9月からは社会と理科が追加されて6科目）で構成されており、文理選択や志望校による区分はなく、受講科目に限らず全科目の解答・解説が掲載された一種類の『旬報』が配布されていた。その後、受験科における物理・科学（1976年度）や日本史・世界史（1979年度）の設置など、コースや科目が拡大され、また1979年度には受験科の英語、数学、国語、物理、化学が2コース（数学は3コース）に分割されて学力や志望校に応じた区分となった。そして1981年度には受験科が国公立大コースと私立大コースに分けられ、共通一次試験コース対策数Ⅰ受験科も追加されている。そして1984年度にさらに文系と理系の区分が導入された時点では全30コースの編成となっている。『旬報』についても、1981年度から1983年度には国公立大と私立大で、1984年度からは文系と理系で別冊子となった。個々の受験生の学力や需要に合わせて指導内容の細分化が進んだことでメディアが細分化され、共通のコミュニケーションの場としての性格を弱めていったといえるだろう。

第二に、先にみたコンピュータの導入による会員情報管理の合理化もまた、会員間コミュニケーションに影響を及ぼした。投稿で用いられる筆名は必ずしも固定されたものではなく、それゆえに筆名は自己表現とコミュニケーションの道具としても機能していた。しかし1981年1月21日号において、新年度からは事前に「筆名カード」により登録した筆名がランキングに掲載されるという通知がなされた。この「筆名カード」の導入は会員数の増加とコンピュータの導入による情報処理の効率化によるものだと考えられるが、この変更により筆名を通じたコミュニケーションの回路は制限されることになったのである。これを受けて、以下のような読者投稿があつた。

我々会員の立場からすれば、これほどおもしろくない制度はない。（中略）筆名登録制度が採用される以前は、答案に書いた自分の筆名が読まれて、人の手によって活字となり成績ランキング欄に載る可能性があつた。（もっとも、この可能性は人により大小様々ではあつたが……）それに毎回筆名を変えることもできた。だから以前は答案に筆名を書く楽しさがあつた。今はこのような楽しみは全くない。（1981年9月21日）

このように会員間コミュニケーションの減少は会員層の変化だけでなく、受験メディアとしての『旬報』の在り方が変容したことにも起因していたと考えられる。こうした様々な環境の変化による帰結として、かつて存在した会員間の活発なコミュニケーションと、それに支えられた「Z会」という学習共同体への帰属意識は次第に薄れていったことが伺える。1980年5月の投稿欄には、「ある冷めた一会員の戯言」と題して以下の投稿が掲載された。

最近このコーナーでZ会に対しエリート意識だの、何かNo. 34では、「Z会は精神安定剤」よなんて宣っておられたけど、本気でそんなこと抱いている方この世に存在してるの、また同旬報のG₂でT・W先生（？）も、「我国最強の学習集団」なるお言葉掲げておられたけど、「集団」って言葉どうも解せない。

個々の会員が各々「実力を高めよう」という純粋な意思の下になるZ会、そこには、その会員個人と、Z会（否、添削者のみかも？）しか存在しないのでは？なぜ、会員方が「集団」を意識し合う必要があるの。僕だけの勝手な解釈ですまないけど、こうしたお言葉には、「権威主義」とでも命名できるようなZ会への絶大な信仰があると思う。（1980年5月11日）

ここでは「Z 会」に共同体としての性格や権威を見出す心性が否定され、あくまで個別の利用者としての個人と、指導サービスの提供者としての Z 会あるいは添削者のみが存在すると述べられている。かつてであれば、こうした問題提起に対しては他の会員から積極的な反論や同意の投稿が寄せられていたであろう。しかしこの投稿に対する反応はなかった。もはや難関大学を目指す集団としての「Z 会」という共通のアイデンティティを持つには会員は増大・多様化し、『旬報』というメディアは細分化・合理化されすぎていたといえる。

注

- 1 増進会会員の各大学合格者数については、増進会出版社（1991）に加え、可能な限りで不足分を『旬報』各号から補った。資料によって合格者数の記載が異なる場合は、刊行時期が後のものを採用している。入学者全数については、駒場 70 年史編集委員会（2021）および京都大学百年史編集委員会（2001）を参照した。なお 1969 年度は東京大学で入学試験自体が行われていない。
- 2 出所等については注 3 同様である。1961 年度、1962 年度の早稲田大学の合格者数については不明との記載があった。また、かつての増進会では東京大学と京都大学は会員名簿と照合してほぼ全数が把握されていたのに対し、それ以外の大学の合格者数は会員からの合格報告に基づいている。そのため単純な比較はできないが、合格者数の増加傾向の把握は一定程度可能だと考えられる。
- 3 1960 年度時点での会員数については、『旬報』1960 年 12 月上旬号の「会員志望校類別」調査の回答者数に関して、「1285 人（全会員の 2.5 割強）」との記載があることから推計した。1980 年度時点での会員数については、社史（増進会出版社 1991）の記載を参照した。
- 4 Z 会本社に保管されていた 1940 年頃の入会案内（後年付された「創立 9 周年」とのメモより推測しており正確な刊行年は不明）によれば、当時の名称は『受験戦線』だった。その後、1955 年度時点では『増進会旬報』の表記となっている。
- 5 分析にあたっては、メディア論における読者・読書共同体研究の視点を参照している。雑誌等のメディアにおける読書実践に関する研究では、投稿欄などの分析を通じて、読書の共同性が論じられてきた（北田・東 2014）。本研究で扱う『増進会旬報』は本来の意味での雑誌とは異なるが、定期刊行され読者投稿などの欄を備えていたという点で雑誌に近い性質を持つ。そうしたメディアにおけるコミュニケーションや共同性を検討するうえで、雑誌を中心とした読者・読書共同体研究の手法は有効であると考えられる。
- 6 社史には、「戦前の通信添削の機関誌類の多くは戦災により現存せず、本社に保管されている『増進会旬報』は昭和 32（1957）年以降のものである」（増進会出版社 1991：27）とある。ただし Z 会本社で閲覧したところ、1956 年度の『旬報』はほぼ現存していなかったものの、1955 年度分については欠落がありつつも十分な冊数が残されていた。そのため、本研究では 1955 年度以降を分析対象としている。

【参考文献】

増進会出版社, 1991, 『新生——Z 会 60 年の歩み』増進会出版社.

〈発 表 資 料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
EDU-Port パイロット事業の類型化と傾向分析	高山敬太・興津妙子編『「教育輸出」を問う—日本型教育の海外展開（EDU-Port）の政治と倫理』	2024 年 9 月
独学する受験生たちの紙上共同体—メディア文化としての受験文化の機能と変容—	ソシオロゴス	2024 年 11 月